

## 巻頭言

エア・アンド・スペース・パワー研究をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

航空研究センターは、エア・パワーに関する国内唯一のシンクタンクとして、これまで「エア・パワー研究」を平成 26 年 7 月に創刊以来、第 6 号まで刊行してまいりました。

わが国を取り巻く安全保障環境は、一層厳しさを増しています。既にご案内のとおり、南シナ海や東シナ海における中国の現状変更の試みは、わが国にとって強く懸念される状況となっており、わが国の領域を守るため、日々陸海空自衛隊がそれぞれの任務に邁進しています。今後は、純然な有事でも平時でもないグレーゾーン事態に如何に対応していくかがわが国にとって大きな課題となっています。他方、自衛隊の対応する領域も、陸・海・空のような従来領域に加え宇宙・サイバーなどの新たな領域にまで拡大してきています。今後は、新たな領域と従来の領域とを有機的に融合した領域横断的な戦力発揮を行うことが極めて重要です。

このような中、現在、航空自衛隊（以下「空自」という。）は、「平成 30 年度以降に係る防衛計画の大綱について」及び「中期防衛力整備計画（平成 30 年度～平成 35 年度）」に基づき、新たな領域における作戦能力獲得のため各種施策に取り組んでいます。その施策の一環として、本年 5 月、空自は、宇宙領域での作戦能力の獲得を目指し「宇宙作戦隊」を新設しました。また、空自は、現状の安全保障環境に適切に対応するため、様々な能力向上のための施策に取り組んでおり、特に、航空研究センターは、今後更にシンクタンクとしての機能強化に取り組んでいく予定です。いうなれば「進化」する空自を頭脳で支える組織に進化しなければならないと考えています。これらの現状認識から、これまで発刊してきた「エア・パワー研究」の書名を、今回から「エア・アンド・スペース・パワー研究」に変更することとしました。

加えて、宇宙・サイバーなどの新たな領域に関する考え方や技術は極めて速いスピードで進展しており、空自は柔軟かつ迅速に対応していかなくはなりません。このため、今回、「エア・アンド・スペース・パワー研究」別冊として「宇宙・サイバー」を発行します。今後も航空研究センターは、新たな領域を含め、これまで以上の研究活動を継続し、空自の進化を支えていきます。

今号のテーマは、「抑止及び対処に向けた今後のエア・パワーの有用性」です。

「抑止理論」は、冷戦時、ソ連を相手に欧州において発展したものです。今日のわが国の安全保障環境に鑑みると改めて注目すべき理論であると考えています。空自は、抑止とそれを裏付ける対処能力を念頭に置いた上で防衛力を整備していく必要があります。このような理由から今回のテーマを設定しました。掲載した論文の中には、領域横断作戦を前提とした総合ミサイル防空やモザイク戦のような将来戦を取り上げたものもあります。

また、令和2年は、新型コロナウイルス感染症が、わが国を含む国際社会の安全保障上の重大な脅威となりました。我々、空自幹部学校においても、その影響から逃れることはできず、本年3月に航空研究センターシンポジウムを予定しておりましたが、感染拡大防止の観点から延期を決定しました。その後7月に規模の縮小や3つの密（密閉・密集・密接）の回避など感染防止対策を万全にし、開催に漕ぎつけることができました。本シンポジウムでは、「軍事作戦の変遷（技術・作戦術の進化が与えた影響）」と今後の展望」及び「抑止及び対処のための真に実効的な防衛力の在り方」をテーマに研究者各位にパネル・ディスカッションしていただきました。今号では、このシンポジウムの内容も掲載しております。先に紹介しました論文とシンポジウムの記事も併せてお読みいただき、これらを題材に読者の方々に空自の将来について関心を寄せていただくことも本書の編纂のねらいの一つでもあります。特に、若い隊員読者からの「尖った」ご意見の投稿は、組織が知的な活動や健全性を有している証左とも言え、ぜひとも積極的に挑戦していただきたいものです。また、空自の隊員やOBにとどまらず、安全保障に関心をお持ちの空自外の皆様方からも、ご意見や論文の投稿をお待ちしております。関係研究機関や読者の方々の貴重なご意見を踏まえ、エア・アンド・スペース・パワー研究の発展を期す所存です。

最後に、論文の執筆等のご協力をいただいた方々に心から感謝を申し上げるとともに、これからも航空研究センターの研究等諸活動にご理解とご協力をお願い申し上げます。

令和3年3月31日

『エア・アンド・スペース・パワー研究』編集長

航空自衛隊幹部学校 副校長

空将補 坂梨 弘明